

## 〈10〉 ま と め

今年度の取り組みによって、生徒たちに次のような変化が見られるようになった。

1. 生徒の運動への取り組みが積極的になってきた。
  - ・各運動種目のそれぞれが持つ楽しさを味わわせることができその結果運動することへの意欲が現われてきた。
  - ・運動を楽しむだけの運動機能が身に付いてきた。
  - ・機能の向上に従って、運動への自信が生れてきた。
2. 休憩時間に運動をしている生徒の姿が見られるようになってきた。
  - ・運動の具体的な楽しみ方がつかめてきた。
  - ・自分でできる運動ができた。
3. 自分の体重・食事を意識する生徒が出てきた。
  - ・自分の肥満を自覚した。
4. 保護者の、子供の身体への意識が高まりつつあり、家庭で食事・運動などについて考えるようになってきた。
  - ・子供の実態が分かってきた。
  - ・保護者が子供のために何かしようという意識を持ち始めた。

以上である。

## Ⅲ 反省と課題

今年度の取り組みを振り返り、次のようにまとめた。

1. 運動経験の積み重ね  
各学習場面では、生徒にいろいろな運動を体験させることができた。特に保健体育科では、時間を確保し、昨年までと違った継続的な指導を行なうことができた。また、行事でも、交流運動会や校外宿泊学習などは、今までなかなか体験させることができなかったことを盛り込むことができた。  
朝の活動での運動は、保健体育の学習とのつながりある学習場面を設定したり、目当てを持たせた持久走への取り組みをしたりして生徒の運動への意欲を高めることはできた。しかし、継続的な指導という点では、やや不十分であった。  
部活動は、ほぼ計画に従って実施した。指導者を固定したことでそれぞれの部で指導の一貫性を持たせることができた。しかし、計画自体が、月に2、3回で、もっと増やしていけないか検討してみる必要がある。  
運動経験を積み重ねることで生徒は変容していくという感触は、

得ることができた。今後、各学習場面の有機的な関連をはかり、もっと多種多様な運動経験の積み重ねを図りたい。

## 2. 運動の習慣化

休憩時間の活用という点では、指導者の声かけや生徒同士の呼び掛け合い・児童生徒会の活動などで、ようやく生徒が教室でじっとせず、外あるいは体育館で何かしようとし始めたところである。これから、具体的に何をすることかということ指導していく必要がある。

家庭との連携では、学校保健だよりほかに学部独自のヘルス情報や発行したり、保護者・指導者が一緒に行なう学部研修会を開いたりして、これまでよりも学校・家庭の間の会話を増やして、保護者からの反応も多く見られるようになってきている。しかし、今年度は、比較的全家庭へ一律的な働き掛けしか出来ておらず、今年度は、より各家庭の実態・生徒の実態を考えた働き掛けあるいは会話をしていく必要がある。

## 3. 身体についての知識について

理科では、生徒の身体的知識について、家庭科では、食事や栄養について、学級指導では、日常生活の中の保健指導についての指導を行なった。

生徒は、この中で今まで知らなかった自分の骨や筋肉といった身体のことについて知り、意識していなかった栄養や体重などのことを意識するようになってきた。しかし、日常生活に生かしているかという点はまだ十分でなく、今後、指導の内容を厳選するとともにもっと日常生活に生かせる指導を行っていく必要がある。

## 4. 日常生活の指導について

日常生活の指導では、身体についての知識とのかかわりの中で、生徒の身体への意識の向上を図った。そして比較的早い時期から毎日2回の体重測定を行ない、体重を身体のパロメーターとして意識させようとした。繰り返すうちに体重測定が習慣化し、生徒の体重への意識はとて高くなった。自分から数キロ減量した生徒も現われ、生徒にとって、具体的でわかりやすい取り組みとなったのでないかと考えている。

## 5. からだの目標について

個人目標・からだの目標と2つの目標を様々な場面を通して指導してきた。生徒は、それなりに変容し成長を見せていると捉えている。しかし、今年度は比較的、集団としての学習場面が多く、生徒一人ひとりのための学習場面の設定は十分ではなかった。今後、集団としての指導と個人に対しての指導の場を考えながら設定していく必要がある。

## 6. 環境整備について

学部として、学級掲示、学部廊下の掲示など気をつけ、生徒の意識が運動に向くように心掛けた。生徒も次第に掲示に意識を向けるようになってきつつあるようだ。しかし、休憩時間に使用するボールやラケットなどの整備は、遅れ、外に出ても遊ぶ道具がないという状態もあった。これからの課題である。

以上のことから、今年度の研究の方向としては、仮説として設定した方向に進みつつあるのではないか、このまま取り組みを進めていくことで研究テーマへ迫っていけるのではないかという感触を得ることができた。今後残された課題も多く、検討を重ねなければならぬ点も少なくなるが、これから研究実践を進めていくことで、生徒の中に眠っている能力と可能性を引き出せるよう努力していきたい。